

1	学校名 北海道有朋高等学校	26～29
---	---------------	-------

平成 29 年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

通信制課程の教育の質の向上を図るため、遠隔授業システムを活用した同時双方向の面接指導による対面式の面接指導の全部代替を実施した場合の単位認定の在り方並びに生徒の学習ニーズに対応した選択科目の在り方についての研究開発。

2 研究の概要

通信教育協力校が行っている対面式の面接指導を、実施校からの遠隔授業システムを活用した同時双方向での面接指導によって全部代替し、当該科目の単位認定を行うとともに、小規模な協力校における生徒の学習ニーズに対応した選択科目の在り方について研究し、広域な北海道における通信教育の質の向上を図る。具体的には、①郡部の通信教育協力校に対して、有朋高校の教員が行う「遠隔授業システムを活用した同時双方向の面接指導」（以下、遠隔スクーリングという。）の取組、②遠隔スクーリング実施科目において、学習指導要領第7款の面接指導免除時間数の規定（メディア毎に10分の6、合計で10分の8）を超えて遠隔スクーリングを行う場合の単位認定の取組、③郡部の小規模校における通信教育選択科目の在り方の研究、④通信教育協力校における生徒へのアンケート調査や配信映像記録の分析などを踏まえて、効果的な遠隔スクーリングの実施と、それに伴う単位認定の在り方について提言を行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

研究開発課題解決のための手段	期待する成果
ア 遠隔授業システムを活用した同時双方向の遠隔スクーリングの配信を行う。	報告課題（レポート）による自学自習との関連を深めることができる面接指導が期待でき、対面式の面接指導と同様の効果を生み出すことが可能となる。
イ 小規模な通信教育協力校での面接指導講師による科目のほかに、遠隔スクーリングによる科目を設置する。	生徒の学習ニーズに対応した、幅広い科目を設置することができ、当該協力校の教員による面接指導科目数を超えた、ワイドなカリキュラムの編成が可能になり、小規模な通信教育協力校での教育課程の充実が期待できる。
ウ 当該の通信教育協力校に設置できなかった科目を、遠隔スクーリングによって開設する。	単位認定できる科目を開設でき、郡部の通信教育における質の向上に貢献でき、教育の機会均等を柱とした学びの保証が可能となる。
エ これまでとは異なる学習形態（遠隔スクーリング）に取り組む。	面接指導者の新たなコミュニケーション能力の開発など、教員のスキルアップを図ることが可能となる。

(2) 教育課程の特例

「世界史B」、「化学基礎」、「地学基礎」、「社会と情報」の遠隔スクーリング実施科目において、学習指導要領第7款の面接指導免除時間数の規定（メディア毎に10分の6、合計で10分の8）を超えて遠隔スクーリングを実施し、評価を行い、単位認定する。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

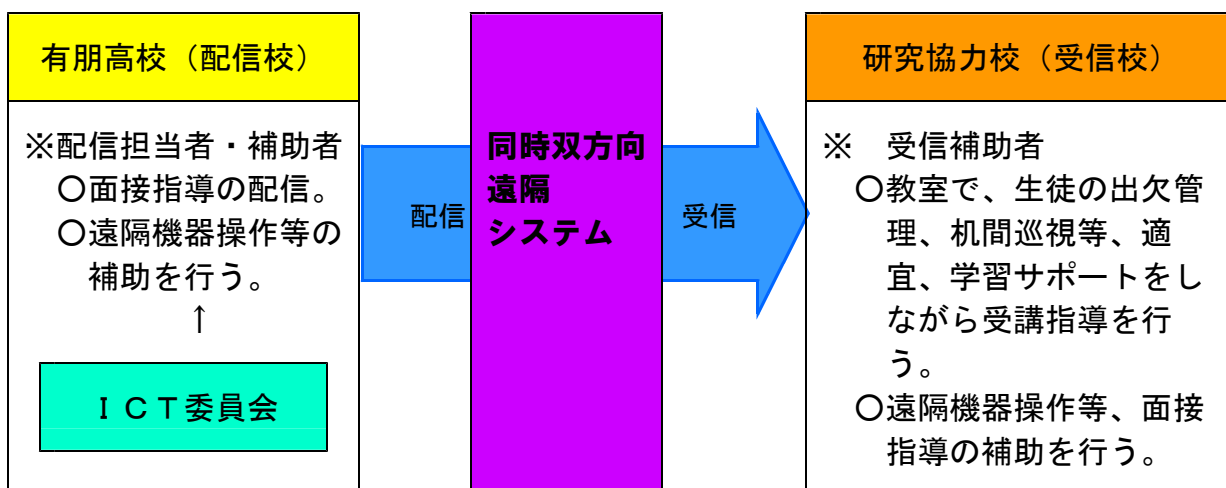
① 遠隔スクーリングを行う教科・科目等

- (ア) 「世界史B」、「化学基礎」、「地学基礎」、「社会と情報」の4科目で実施。
- (イ) 配信先の研究協力校は、富良野高校、中標津高校、稚内高校の3校。

面接指導配信を試行的に実施して、対面スクーリングと遠隔スクーリングとを併用した実践研究を実施。

② 研究の実践方法

(ア) 遠隔スクーリング配信の仕組み



※配信側は配信者と補助者の2名、受信側は補助者1名で、計3名による同時双方向の配信

③ 評価方法

- ア 生徒・教師へのアンケート調査や、学校評価、公開面接の実施
- イ 配信映像記録による分析

(2) 研究の経過

<p>第一年次</p>	<p>◆<u>遠隔スクーリングの実施と単位認定にかかる実践研究の準備</u></p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 運営指導委員会及び校内で組織する研究開発にかかる委員会の編成 運営指導委員会の構成は、道立教育研究所職員、大学教授、道教委 高校教育課の職員等によって組織 (2) 通信教育協力校の中から研究協力校の選定及び遠隔スクーリング実 施可能な教科・科目の決定 (3) 遠隔スクーリングで行われるそれぞれの教科・科目の単位認定に向けた準備 ・校内規定の整備（履修認定や単位修得の要件等）等 (4) 第2年次からの実践研究に向けての遠隔授業システムの習熟 ・遠隔スクーリングの試行実施
-------------	--

	<p>(5) 全日制高校が中心となっている「全道高等学校遠隔授業実践研究協議会」(道教委新しい高校づくり推進室主催)への参加(2回)</p> <p>(6) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査の実施</p> <p>(7) 運営指導委員会の開催(2回)</p> <p>(8) 次年度以降の研究の方向性の検討</p>																						
第二年次	<p>◆<u>遠隔スクーリング実施科目における単位認定の在り方の研究</u></p> <p>(1) 通年の遠隔スクーリングの実施</p> <p>ア 遠隔スクーリングの効果の検証</p> <p>・生徒・教師へのアンケート調査や学校評価の実施、公開面接の実施</p> <p>イ 単位認定に向けた成果と課題の整理</p> <p>(2) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査の実施</p> <p>(3) 運営指導委員会の開催(2回)</p> <p>(4) 全日制高校が中心となっている「全道高等学校遠隔授業実践研究協議会」(道教委新しい高校づくり推進室主催)への参加(1回)</p> <p>(5) 年度末における生徒、教師へのアンケート調査や学校評価の実施</p>																						
第三年次	<p>◆<u>遠隔スクーリング実施科目における評価の工夫と単位認定の在り方の研究</u></p> <p>(1) 通年にわたる遠隔スクーリングの円滑な実施</p> <p>ア 通年の遠隔スクーリングの円滑な実施のための工夫改善</p> <p>・生徒・教師へのアンケート調査や学校評価の実施、公開面接の実施</p> <p>イ 今年度末の単位認定の課題の整理とその解決に向けた工夫改善</p> <p>(2) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査及び配信映像記録による分析</p> <p>(3) 運営指導委員会の開催(2回)</p> <p>(4) 全日制高校が中心となっている「全道高等学校遠隔授業実践研究協議会」(道教委教育政策課主催)への参加(1回)</p> <p>(5) 第4年次に向けた研究成果の取りまとめのための諸準備</p> <p>(6) 年度末における配信者・補助者へのアンケート調査や学校評価の実施</p>																						
第四年次	<p>◆<u>遠隔スクーリング実施科目における評価の工夫と単位認定の在り方及び選択科目の設置にかかる研究</u></p> <p>(1) 通年にわたる遠隔スクーリングの円滑な実施</p> <p>遠隔スクーリングを実施した教科・科目(時間数)</p> <p>次の研究協力校3校(富良野高校・中標津高校・稚内高校)にて以下の科目で遠隔スクーリング指導を行った。</p> <table border="1" data-bbox="411 1675 1347 1895"> <thead> <tr> <th></th> <th>研究協力校</th> <th>富良野高校</th> <th>中標津高校</th> <th>稚内高校</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">科 目</td> <td>世界史B</td> <td>○(8)</td> <td></td> <td>○(8)</td> </tr> <tr> <td>化学基礎</td> <td></td> <td>○(14)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>地学基礎</td> <td></td> <td></td> <td>○(4)</td> </tr> <tr> <td>社会と情報</td> <td>○(8)</td> <td></td> <td>○(8)</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 遠隔スクーリングの円滑な実施のための工夫改善</p> <p>イ デジタル評価表の活用についての研究</p> <p>(2) 遠隔スクーリング(面接)の役割についての研究フォーラム(校内研修)</p> <p>9月21日(木)実施</p>		研究協力校	富良野高校	中標津高校	稚内高校	科 目	世界史B	○(8)		○(8)	化学基礎		○(14)		地学基礎			○(4)	社会と情報	○(8)		○(8)
	研究協力校	富良野高校	中標津高校	稚内高校																			
科 目	世界史B	○(8)		○(8)																			
	化学基礎		○(14)																				
	地学基礎			○(4)																			
	社会と情報	○(8)		○(8)																			

	<p>主な提言内容 ア 通信制課程の面接と「授業」について イ 大学での遠隔教育の観点について ウ 面接指導の歴史的な解釈について</p> <p>(3) 運営指導委員会の開催（2回） 第1回 10月1日（日） 主な内容 ア 遠隔スクーリング参観「世界史B」 多地点(富良野・中標津・有朋) 接続機器を利用した遠隔スクーリング イ 研究協議 第2回 2月中旬予定</p> <p>(4) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査の実施・配信映像記録の分析 (5) 教科ベースでの全部代替の可能性の研究及び一覧表の作成 (6) 研究成果の取りまとめ</p>
--	---

(3) 評価に関する取組

<p>第一年次 (平成26年度)</p>	<p>◆遠隔スクーリングの実施と単位認定にかかる実践研究の準備</p> <p>(1) 面接指導案に基づく面接実施後の検討会と評価の実施 (2) 校内規定の点検・評価 (3) 定期考査問題の点検・評価 (4) 校内研究開発委員会における遠隔スクーリングの評価の実施 (5) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査の実施と評価 生徒に対するアンケートにおいては、「遠隔スクーリング」への適応状況が分かるアンケート項目を加えて実施し、結果を評価 (6) 公開面接を実施し、運営指導委員会において遠隔スクーリングの評価の実施 (7) 「全道高等学校遠隔授業実践研究協議会」への参加による遠隔スクーリングの取組の点検と評価の実施</p>
<p>第二年次 (平成27年度)</p>	<p>◆遠隔スクーリング実施科目における単位認定の在り方の研究</p> <p>(1) 面接指導案に基づく面接実施後の面接検討会と面接評価の実施 (2) 校内規定の点検・評価 (3) 校内研究開発委員会における遠隔スクーリングの評価の実施 (4) 単位認定の要件の点検・評価 (5) 遠隔スクーリングによる科目のそれぞれの単位認定の内容の比較検証と評価 (6) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査の実施と評価 (7) 公開面接を実施し、運営指導委員会において遠隔スクーリングの評価の実施 (8) 全道高等学校遠隔授業実践研究協議会への参加による遠隔スクーリングの取組の点検と評価の実施</p>
<p>第三年次</p>	<p>◆遠隔スクーリング実施科目における評価の工夫と単位認定の在り方の研究</p>

<p>(平成28年度)</p>	<ul style="list-style-type: none"> (1) 学習指導案に基づく面接実施後の面接検討会と面接評価の実施 (2) 校内規定の点検・評価 (3) 校内研究開発委員会における遠隔スクーリングの評価の実施 <ul style="list-style-type: none"> ア 通信制の学習構造についての検討 イ 面接指導設計案の作成と検討 (4) 単位認定の要件の点検・評価 <ul style="list-style-type: none"> ア デジタル評価表の作成と検討 イ 遠隔スクーリングと直接対面面接、直接対面授業、報告課題との比較検討 (5) 遠隔スクーリングによる科目のそれぞれの単位認定の内容の比較検証と評価 (6) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査実施及び配信映像記録の分析と評価 (7) 公開面接を実施し、運営指導委員会において遠隔スクーリングの評価の実施 (8) 全道高等学校遠隔授業実践研究協議会への参加による遠隔スクーリングの取組の点検と評価及び3年間の研究成果の検証
<p>第四年次 (平成29年度)</p>	<p><u>◆遠隔スクーリング実施科目における単位認定の在り方及び選択科目の設置にかかる教育課程の研究</u></p> <ul style="list-style-type: none"> (1) デジタル評価表の作成と活用についての検討・評価 (2) 遠隔スクーリングの役割についての検討 (3) 教科ベースでの全部代替の可能性の検討 (4) 校内研究開発委員会における遠隔スクーリングの評価の実施 (5) 単位認定の要件の点検・評価 (6) 対面面接と遠隔スクーリングに基づくそれぞれの単位認定の比較検証と評価 (7) 生徒・教師を対象にしたアンケート調査実施及び配信映像記録の分析と評価 (8) 運営指導委員会における遠隔スクーリングの評価の実施 (9) 4年間の研究成果の検証

5 研究開発の成果

(1) 生徒への効果

デュアルストリーム配信、書画カメラ、セカンドカメラなどを用いた配信を実施し、面接記録映像、アンケート調査、報告課題の感想欄の記入などから分析・整理を行った。その結果、それぞれの科目において以下の学習効果が認められた。

① 実験・実習を伴わない科目「世界史B」

【多地点(富良野・中標津・有朋) 接続機器を利用した遠隔スクーリングにおいて】

世界史Bでは、北海道内の遺物・遺跡を用いることで、実生活と関連付けられる題材を年間指導計画に位置付けている。報告課題では、思考力を育成するため、東アジア史に関して一次史料(絵画史料)を用いて、正解のない課題を考察させている。評価は、生徒の考えたことが文章で書かれていれば正解とした。

【問題例と生徒の解答】



問11. 写真は教科書にも記載がある「混一疆理歴代国都之図」（こんいつきょうり・れきだいこくとのず）である。（教科書p.99）。これは15世紀の朝鮮で作られた、世界最古の世界地図であるが、さて皆さんはこの地図を見てどういう感想を持ちますか。例えば日本は右下に90度ひっくり返っているなど、自由に感想を書きなさい。

【解答欄の記述】

「赤い点々は何ですか」「中国がやたらでかいんですけど」「日本が右下にとあるのはレポートにあるんですけど、どうしてこういう書き方になるんですか」「この時代、ドローンも何も無い中で、どうしてこういう地図を作ろうと思ったのか、そこがよくわからない」

このように報告課題には、生徒は自分なりの言葉で解答しており、出題した側の意図を超えて考察を進めていたことも伺えた。

多地点（富良野・中標津・有朋）接続機器を利用した遠隔スクーリングにおいても報告課題と同様の考察を期待したが、異なる協力校に通学する生徒同士では、なかなか積極的にお互いに話し合うという段階まではいかなかった。後日送られてきた感想では「知らない人に対しては、けっこうけいはいするので、つかれました。」

（原文まま）という記述があった。通信制で学ぶ生徒の大半はこのように人と積極的に会話したり接したりするのが苦手であり、初対面の生徒同士による主体的・対話的な活動の実践の難しさを実感した。

多地点接続機器を利用した遠隔スクーリングにおいても、スクーリングを複数回実施することで、生徒は正解のない問いに、真摯に向かい自分なりの言葉でしっかりと考えて答えることができるようになった。生徒間の討論には、事前に共有できる場の設定が必要であり、今後の課題であるが、人間関係を構築することに課題がある生徒にとっては、直接対面よりも会話しやすいなどの副次的な効果も見られた。



【多地点（富良野・中標津・有朋）接続機器を利用した遠隔スクーリングの場面】

② 実験を伴う科目「化学基礎」、「地学基礎」

ア 化学基礎

昨年まで遠隔スクーリングで行っていた実験の事前指導を、今年度は対面面接で行い、様々な成果が見られた。簡単な操作（マイクロプレートにポリ点眼容器から

数滴落とす操作)でも手が震え、戸惑う状況が見られた。これらのことは、一度会って見ないと分からないことで、生徒の様子を把握して、操作に対して安心感を与える機会が必要であることを実感した。このときの直接対面面接後のアンケートでは、「人と接するのが苦手をつかれた。」というコメントがあり、画面越しではわからない生徒の心理を直接対面で理解することができた。これらのことを踏まえ、直接対面面接後にマイクロプレートを使った実験操作を遠隔スクリーングで行ったところ、実験前の手の震えがなくなり、操作(中和滴定)がスムーズになり、苦手と感じることなく対話をしながら、たんとした動きで実験操作を進めることができた。

化学のように実験・実習を伴う科目では、事前の生徒とのラポール形成が重要で、それによって遠隔スクリーングでも、個々が取組める実験(マイクロプレート実験など)は十分可能であることが分かった。



【直接対面面接で簡単な操作を体験させる場面】



【円滑な動きで実験操作を進める場面】

イ 地学基礎

緯度が表示されるスマートフォンのアプリ(コンパス)を利用して札幌と稚内の緯度を瞬時に測定する実習を行った。この実習を通して配信側(教員)と受信側(生徒)との距離感も瞬時に縮まった。これを利用して太陽高度を測ることで地球の大きさ・形を導き出す方法を考えさせることができた。生徒の感想では「遠いけど、近いと感じました。」「緯度って、意味があるんですね。」など地球の大きさ・形を自ら求めることから出発して、地球の形成、太陽系の形成、宇宙の形成へと一連の流れとして理解を深化させることができた。



【稚内の天気や遠景を見て遠隔地の札幌と比較する場面】

また、カメラの映像を通して、遠隔地の札幌と稚内の天気や遠景を瞬時に知ることができた。これらによって天気の違いだけではなく、遠景の見え方から空気中の水蒸気量を知り、雨写真・水蒸気写真・天気図なども利用することで大気の運動について考えさせることができ、深い学びへと繋げることができた。

また生徒の感想から「直接話すことで質問やわからないことが聞けるけど、遠隔でも聞けるし、映像もよく見えるので、分かりやすいです。」「ただレポートをやるより、すごく分かりやすいので、良いと思います。」「イメージがよくでき、理解できた。大変分かりやすかった。」などのコメントがあった。稚内と札幌で320kmという距離がありながらも、地域教材を活用して生徒が知っていることから学習内容をはじめることができ、地学で扱う時間・空間スケールを直接対面面接より実感しやすいという利点が遠隔面接にあることが分かった。

③ 実習を伴うことが可能な科目「社会と情報」

遠隔面接では、細かい技術的な実習は難しい。そのような環境の中でもできる実習として、PC教室内でLANとそれを構成する機器を探してみるというアクティビティを試みた。目の前のPCから机の下を辿って、ネットワークの具体的なイメージを獲得することができた。このような身体活動を伴った実習遠隔でも可能であり、生徒本人にとっては新が鮮な体験として、楽しそうに活動している様子が映像記録からも伺えた。

「人の見え方感じ方」についての実験39色に塗り分けられたストライプから何色を識別できるか)を行った。自分の見え方を確認するために席を立ててスクリーンに歩み寄り、配信したスライドに集中して識別しようとする生徒の様子が伺えた。その後、生徒からの観察報告を受けて、人の持つ視細胞の種類が異なること、そのことで人の認識の仕方が一様ではないことを解説した。たとえ良好な対話をしているように感じていても、人は自分が見えていることをそのまま相手と共有できているわけではないということを確認できた。自分と人との相違を、感覚的、感情的な面からではなく、実体験を伴った客観的な面から理解がなされた。

「メディアの選択(例: 気持ち伝わるのは手書きか、ワープロか)」について、意図的に「どちらが相応しいか」という二者択一に聞こえるような質問をした。世の中の的にはステレオタイプの反応があるのが普通だが、生徒は「それは状況によって変わってくる」として、いろいろな具体的な場合を挙げて、それぞれにおける感じ方の違いについて述べた。簡単な判断の仕方に流れるのではなく、それまでのメディアについての学習を踏まえながら安易



【楽しそうに機器を探す場面】



【配信されたスライドに集中する場面】



【対話している場面】

な結論を乗り越え自分の考えを述べることで、対話的で深い学びにつながる展開になった。

また、こちらの想定を上回る質の回答をしたことに対して高い評価をしたところ、素直に喜ぶ姿の中に学びに向かう力の向上が見られた。



【高い評価に喜んでいる場面】

(2) 教師への効果

遠隔スクーリング（遠隔面接）には、協力校への負担軽減や面接指導を通じ教員の資質・能力の向上に資するという効果が期待できる。これまでの研究成果から、次のような報告がされている。

(1) 配信側の教員にとっての効果

ア 機器を介しての指導から生じる制約（音声等のタイムラグ、生徒の理解度確認の難しさなど）を克服するための工夫と改善が、直接対面の面接指導での指導力向上に大きく寄与している。

イ コミュニケーションをきわめて苦手とする少人数の生徒に対して、教員の投げかけに対する反応の薄さや不活発な面接状況を克服するための工夫と改善、また、信頼関係の構築等が、直接対面の面接指導等での指導力向上に大きく寄与している。

ウ 基礎学力の乏しい生徒に対して、遠隔を通じた指導の難しさを克服するための工夫と改善がされ、学習内容によってはユニバーサルデザインされた学習指導へとつながっている。

エ 遠隔スクーリング（遠隔面接）の指導中は、常時、モニター上に自分の姿が映像として映り続けており、学習指導の状況をリアルタイムで確認できる状態である。常に自らの指導を振り返りながら展開していくことは、きわめて効果的な研修であると言える。（教師側のメタ認知能力向上）

(2) 受信側の補助教員にとっての効果

ア 補助員にとっては、遠隔スクーリングが面接参観となっており、他教科の面接指導であっても、実施校の面接を知ることで、協力校生徒への働きかけを行う際に参考となる（協力校生徒の報告課題は実施校の教員が添削指導を行う）。

イ 地方の協力校には若い教員が多く、経験豊かなベテラン教員の面接指導を参観することは大きな研修効果がある。協力校での直接対面の面接指導だけではなく、自校での授業改善等に積極的に役立てることができ、初任者などの若い教員への研修として有効である。

授業の工夫・改善は、これからの「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」の実現のためには欠かすことのできない教員の資質・能力である。

(3) 実施上の問題点と今後の課題

実施上の問題点としては、遠隔スクーリングでは通信回線トラブルの対応を検討しておく必要がある。特に多地点接続機器を利用した複数の箇所への遠隔スクーリングでは、中断された場合、その時間を補完する内容を想定しておくことが重要である。

また、これまで取り組んだ4つの科目とも配信側、受信側に補助者を配置し、生徒と同じ目線で客観的に面接内容を観察しながら、その状況を面接者に伝えたことは重要である。さらに、実験・実習を伴う科目（化学基礎・地学基礎）では、一度生徒に直接対面で面接指導を行い、その後の実験・実習の指導を円滑に進めることが重要である。

今後の課題としては、実技科目（体育や芸術）や他教科・科目で、遠隔スクーリングを
実践した場合、何ができて、何ができないのか、どんな工夫を加えれば可能かなどを教科
ベースで整理したものが必要であり、直接対面面接との比較において遠隔面接の優位性を
明確にする実践が望まれる。総じて、年間面接計画・遠隔スクーリングモデル（面接指導
設計案）を備え、生徒個々の取組状況をデジタル評価表などで継続的に把握しながら対
話的な個別指導を中心とした実践が通信教育における質の確保・向上方策の一助となるも
のと期待される。

平成29年度 通信制課程 普通科 新入学生 教育課程表 (一般生)

教科科目	標準単位	修業年限3年コース			修業年限4年コース				
		1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	4年次	
各 学 科 に 共 通 す る 各 教 科 ・ 科 目	国語総合	○4	③	③					
	国語表現	3			3				
	現代文B	4			4				
	古典B	4			4				
	世界史B	○4	④						
	日本史B	△4		①	選				
	地理B	△4		④	択				
	現代社会	○2	②						
	倫理	2		2					
	政治・経済	2		2					
数 学	数学I	○3	③	②					
	数学II	4			3・3				
	数学A	2		2					
	科学と人間生活	○2	②						
	物理基礎	△2		③	選				
	化学基礎	△2		③					
	生物基礎	△2		③	択				
	地学基礎	△2		③					
	保健体育	○7~8	②	②	②・①				
	体育	○2	②						
芸 術	音楽I	△2		②					
	音楽II	2			2				
	美術I	△2		②					
	美術II	2			2				
	書道I	△2		②					
	書道II	2			2				
外 国 語	コミュニケーション英語I	○3	②	②					
	コミュニケーション英語II	4			3・3				
	英語会話	2			2				
家 庭 情 報	家庭総合	○4	②	②					
	社会と情報	○2		②					
専 門 学 科	商業 広告と販売促進	2~6			3				
	商業 経済活動と法	2~6			3				
	商業 簿記	2~6			3				
	家庭 子どもの発達と保育	2~6			2				
総合的な学習の時間「自主研究」	○3~6		③						
小 計	必修		22	25	3	22	20	7	1
	選択		0	0~2	22~24	0	0	10~14	10~14
合 計			22	25~27	25~27	22	20	17~21	11~15
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ○印は必修科目である。 △印は選択必修科目である。 前年次選択、選択必修科目のうち未修得のものは、後年次で履修できる。 74単位以上の修得で卒業できる。 		<p>☆次の条件の全てを充足し手続きを行わなければ、【修業年限3年コース】で学ぶことが出来ない。</p> <p>(1) 修得単位が全く無い生徒であること (入学区分や入学年度は不問)。</p> <p>(2) 修業年限3年コースに進む前年度に、1年次科目を順調に学習し、全てを単位修得していること。</p> <p>(3) 健康や勤務などに無理がなく、保護者、職場、HR担任や地方指導員の理解が得られること。</p> <p>☆2年次修了時に履修していた全ての単位を修得していなければ、修業年限3年コースを継続することが出来ない。</p>						

学校等の概要

平成29年12月1日現在

1 学校名、校長名

ホッカド`ウウホコトガ`ッコ
 学校名 北海道有朋高等学校
 校長名 宮田 日出夫

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区屯田9条7丁目
 電話番号 011-773-8200
 FAX番号 011-773-8300

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
通信制	普通科	971		384		789		591		2735	
計		971		384		789		591		2735	

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭 (非常勤)	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	1			63		1			5
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		13		85						